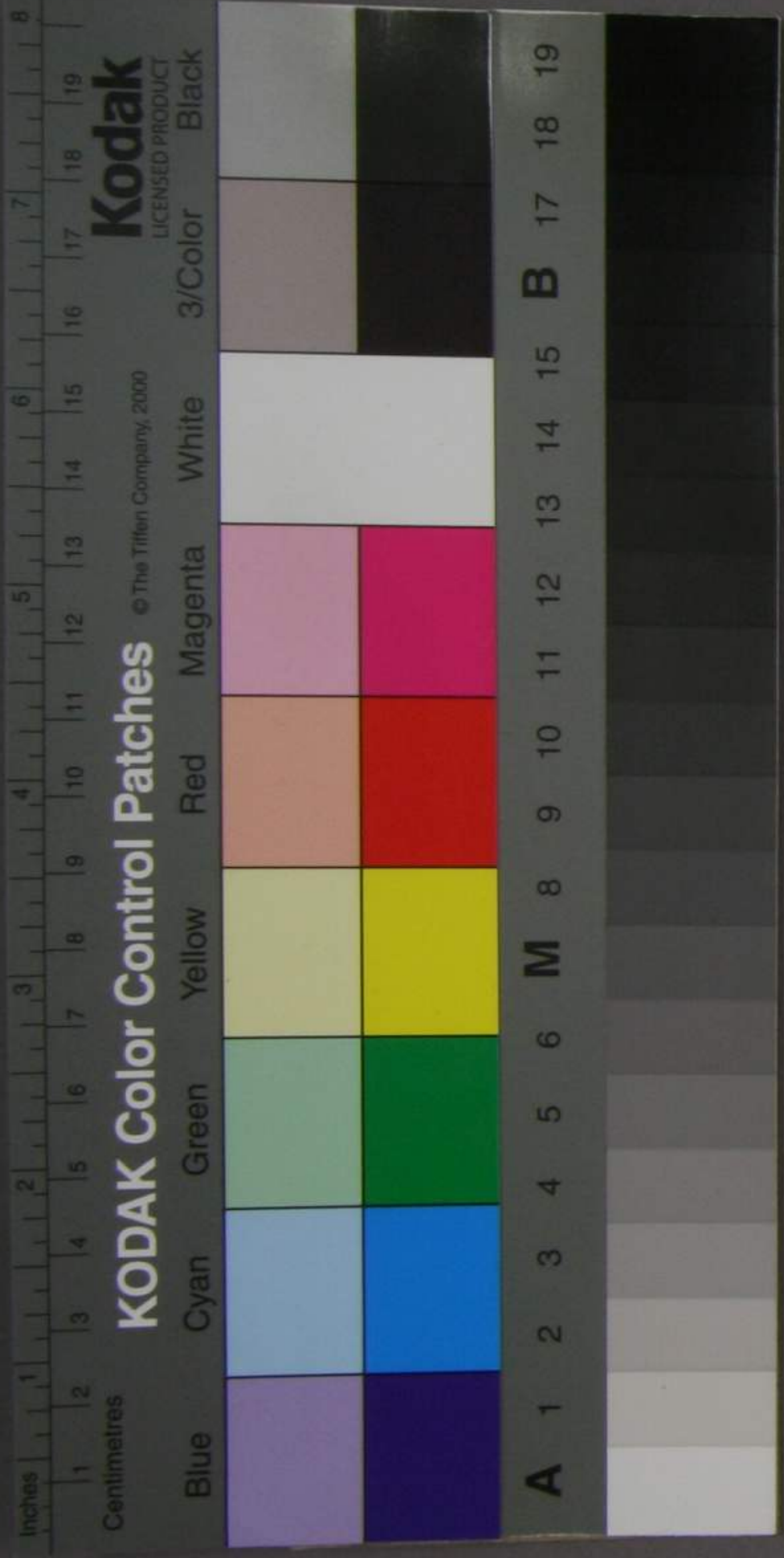


414  
A 2013

田稅新法駁議

大正十一年四月  
大隈侯爵邸寄贈

友人神田孝平嘗田稅改革ノ議ヲ州シ壬申  
ノ歲之ヲ公布シテ田稅新法ト題籤ス予仄  
ニ此拳アルヲ聞クト虽凡其旨趣ノ如何ナ  
ルヲ詳ニセス予平生田稅ノ事ニ注意セサ  
ルヲ以其書ヲ購シテ之ヲ閱スルヲナカリ  
シニ亡幾シテ我政府田稅改正ノ拳アリ容  
歲癸酉七月遂ニ地稅改正法ノ一書ヲ頒千





上諭施行ス然其事至大至重ナルヲ猶地方  
官心得書ニ載スル所ノ如ク各地方皆従前  
ノ成例アリ俄ニ新法ニ変シ難キヲ以山口  
縣ヲ除クノ外未一縣ニ之ヲ施行スル者ア  
ルヲ聞カス予又竊ニ之ヲ道路ニ聞クニ往  
往新法ノ不便ヲ論スル者アリ今夏郷里ニ  
歸ル又地主ト佃戸トノ權利ヲ争フテ決セ  
ス地方官又説諭ノ口實ニ窮スルヲ見ル人

皆云フ新法ノ大意ハ悉ク神田氏田稅新法  
ニ出ツト予初意フ神田氏ハ必其説ヲ為サ  
ス仍ホ此説ヲ述フ人皆服セス遂ニ其書ヲ  
携エ來テ予ニ示ス予於是始テ其全ク神田  
氏ノ説ニ本ツクヲ悟ル予神田氏ニ會ス  
ル寸拳テ以之ヲ語ル語テ未盡キス仍テ駁  
議ヲ作ル蓋國家人民ノ重事ニ係ル及覆辨  
論セサルヲ得サレハナリ



田稅改革ノ議初メニハ從來田稅ノ法ニ付キテ  
種々ノ弊アルヲ論シ次ニ諸弊ヲ除クノ法ヲ拳  
テ田地賣買ヲ許シ沽券高ニ準シ金子ニテ稅ヲ  
收メシム可シト云ヒ後又其法ノ利ヲ條陳シ最  
後ニハ均田ノ陋說ヲ破ル皆鑿々トシテ皆察ニ  
中ル者ノ如ク且其遣詞措意極簡極明ニシテ讀  
者ヲシテ喜テ自勝エザラシム此其妙說タル所  
以ニシテ而シテ其妙說タラザル所以モ亦此ニ

在ルナリ蓋其言變化多端ナリト虽其大意ヲ  
察スルニ上ニ言フ田地ノ賣買ヲ許ス沽券高ニ  
準シ金子ニテ稅ヲ收メシムルニ如カザルノ三  
句ヨリ外ニ出テス天下至テ處シ難キノヲ以  
只此三句ニ付ス其措置方法ノ何如ニ論及セス  
生吞活剥復咀嚼ヲ加エス是以只此三句ヨリシ  
テ施行ノ際ニ方ッテ無限ノ葛藤ヲ生ス世人ノ已  
ニ能ク知ル所ノ者ナリ此三句ノ眼目タル者已



ニ適當ニ非サレハ其枝葉タル者モ亦從テ見ル  
ニ足ラス抑此無限ノ葛藤ヲ生スルハ專ラ施行  
スル者ノ責ニ歸ス可シト虽凡作者語而不詳ノ  
責自ラ免カル、一能ハス試ニ作者ヲシテ後ニ  
施行スル者ト地ヲ換エシムル寸ハ不知作者能  
ク施行スル者ノ説ヨリ外ニ良策ヲ有セン乎之  
アリテ言此ニ及ハザルハ不備ト謂フ可シ若全  
ク之ニ蒙スルノ策ナキハ是不明ナリ若又冥思

黙想シテ現今ノ天地外ニ立テ根源ヨリ訖セル  
ナラハ其説誠ニ行ハル可ケレ凡立言ノ體尤時  
務ヲ切<sup>論</sup>セルヲ見レハ固リ想像ノ論ナリト言フ  
可カラス請試ニ条ヲ分ツテ之ヲ論セシ  
田地賣買ヲ許スハ可ナリト虽凡賣買スルノ條  
理ト賣買スルノ方法トニ至テハ關係至重ナリ  
故ニ先之ヲ論セサル一ヲ得ス抑本邦ノ田地其  
所有ノ孰レニ属スルカ精微ニ剖判シ難シト虽



正  
大抵之ヲ官ニ属セリトスルノ説居多ナリ間  
又一種ノ色目ヲ以人民ニ属スル者アリト虽正  
一旦政府之ヲ要トスルニ及ニテハ片紙ノ命下  
ル毎ニ奔走之ヲ奉ス地主ノ権アルヲナシ且近  
例ニ賣買ノ禁アルヲ以之ヲ推ス寸ハ全ク私有  
物ノ體裁ニ非ス然ラハ則全國ノ田地ハ率子官  
ニ属スル者トセシカ則官ハ即地主ニシテ田地  
ヲ賣ルノ権ヲ有スル者ナリ何ソ故ナクシ之ヲ

無價ニシテ與ヘシ今民ノ賣買ヲ許スニ前ツテ  
其官物タルカ私物タルカヲ判断セシテ概シ  
テ之ヲ私有物ナリト思ヒ何ノ據トコロモナク  
直キニ其所有ノ権ヲ與フ蓋政府ノ雅量ト称ス  
可シト虽正抑<sup>モ</sup>其財産ヲ愛惜セサルノ甚キニ非  
スヤ爰ニ又一疑團アリ數年前ニ在テハ全國ノ  
土地人民渾テ幕府ト諸侯旗本ノ有ニ非サルヲ  
無シ其所有タルノ證モ亦太<sup>ク</sup>確ナリ然ルニ其天



子ノ有ス可キヲ假ルニ近キヲ以之ヲ返ス可キ  
ノ理アリトシテ版籍ヲ奉還シテ維新ノ朝廷ト  
ハナレリ然ル寸ハ愈官有ノ物タル可キニ今之  
ヲ數百年ノ所有者ヨリ之ヲ取テ一朝ニシテ佃  
戸ノ如キ者ニ與フ夫佃戸タル者ハ固其旧所有  
者ノ佃戸タル者ニシテ其旧所有者ハ固リ朝廷  
ニ功勞アル者ノ子孫ナリ何ソ夫彼ニ厚クシテ  
此ニ薄キヤ夫華士族タル者ハ己ニ官人トナリ

武人トナルノ義務ヲ免カル、ヲ以徒ニシテ私  
有ス可カラザルノ理ハアル可シト虽凡天下  
一般人民ヲシテ故ナク其財産ヲ拾ヒ得可カラシ  
ムルハ己ニ財産權利魚則ニ背キ又經濟ノ本意  
ニ非サルニ似タリ此等ハ皆田地ノ賣買ヲ許ス  
ニ先ツテ論究ス可キ者ナル可シ然ルヲ只田地  
ノ賣買ヲ許スノ一句ヲ以之ヲ括盡セントス而  
シテ其果シテ許ス可キヤ許ス可カラザルヤ誰



カ賣人ナルヤ抑又誰カ買人ナルヤ且其幾分ハ  
誰ニ屬スル者ニシテ許ス可キ者タルヤ幾分ハ  
然ラサルヤ幾分ハ誰カ賣リテ幾分ハ誰カ買フ  
可キヤ是等ノ處ニ至テ明解ナケレハ其所謂田  
地ノ賣買ヲ許ストノ説モ遂ニ行フ可カラサル  
ニ歸セシノミ

其所謂活券金高ニ準シ稅ヲ收メシムルト如何  
ナル方法ヲ以ス可キヤ最初ヨリ無稅ノ地從來

諸處ニ不少此等ノ處ニ相當ノ地價ヲ盛リ付ケ  
券狀ニ書シテ其所有者ニ與ヘテ其地券金高ノ  
幾分ヲ抽ツルトハ此法ヲ行フニ付少シモ難事  
ナカル可シト虽且一體田地ノ色目従前ノ賦課  
古今ノ沿革アリ各地ノ習慣アリ或錯雜シ或隱  
匿シ其地券ヲ與フルモ亦易事ニ非ス假如且ハ  
一區ノ地アリ其地ハ本田ニシテ百姓之カ佃戸  
トナル甲某トス甲其地ヲ乙ニ托シテ之ヲ耕サ



シムルニ租ヲ官ニ納メ又小作米ヲ甲ニ與フル  
ニ尚餘リノ利アリ乙又之ヲ丙ニ托シテ耕サシ  
ムモ亦猶此ノ如シ於是一種ノ賣買ヲ生シ其賣  
買ノ際皆若干ノ金ヲ授受シ甲乙亦皆其地ノ餘  
利ヨリシテ若干ノ米ヲ收ム皆一種ノ佃戸ナリ  
又皆一種ノ地主ナリ此ノ如ク錯雜シタル者ハ  
官ヲ以地主トスルカ甲ヲ以地主トスルカ又乙  
或丙ヲ以地主トスルカ地券ハ此ノ中ノ孰レニ

與フ可キヤ地券ニ記ス可キ金高ハ孰レノ地主  
ノ申立ル所ニ由ル可キヤ地價ヲ定ムルハ如何  
ナル法ヲ用ユルヤ凡地價ハ之ヲ賣買スル時ノ  
景況ノマ、ニテ定マル者ナリ假如又ハ地味善  
クシテ官ニ納ムル租稅郡村ノ入費等少キ處ハ  
入額ノ多キヲ以其地ノ價從テ高カラサルヲ得  
ス此ニ反シテ地味惡クシテ租稅入費ノ多キ處  
ハ其入額少キヲ以地價從テ減ス自然ノ理ナリ

大文



且地味ノ善惡ヲ論セス又縦令地味善ト虽凡租  
税入費多ケレハ地價却テ賤ク地味惡ト虽凡租  
税入費少ケレハ地價却テ貴シ是亦必至ノ勢ナ  
リ故ニ地價ハ地面ノ廣狹ト地味ノ善惡トニノ  
ミ因テ生スル者ニ非ス今一人アリテ一區ノ地  
ヲ買ハン其地ハ善ナレ凡租税入費ノ多キヲ以  
賤價ニ之ヲ買フタリ又一人アリテ同シ廣サノ  
一區ノ地ヲ買ハンニ其地ハ惡地ナレ凡租税入

費ノ少キヲ以其價ヲ多ク拂フタリ然ルニ今此  
二人ニ券状ヲ與フ可<sup>ル</sup>討若其地主ノ申立ル所各  
其實ヲ以センニ惡地ヲ有スル者ハ其嘗テ多ク  
金ヲ出セルヲ以券状ノ金高從テ多ク租税モ入  
費モ亦從テ多シ而シテ善地ヲ有スル者ハ其嘗  
テ金ヲ出セルヲ少キヲ以券状ノ金高少ク租税  
モ入費モ亦從テ少シ然ル寸ハ券状ノ金高ハ實  
地ノ利益トハ反對セル者ニシテ租税入費ノ賦



課モ亦太々不條理ナル者ナリ若従前貢租ノ額依然存在セル上ニ此一種ノ雜稅ヲ賦スルニ此ノ如キ地券ノ金高ヲ目安トセハ當然トス可シト虽氏地價ノ幾分ヲ以従前ノ貢租ニ換工従前ノ貢租ハ無キ物トナル故ニ地主ノ申立全ク據ル可キ者ニ非サルトトナレリ此故ニ施行ノ官負ニ在ラハ實際ノ不都合之アルヨリ改正法ノ算例ヲ設ケ嘗テ賣買スル所ノ真價ニ由ラスニ

テ一種ノ檢査法ヲ設ケ政府ニテ勝手ニ地價ヲ盛リ付ルトトナレリ此法ノ如クニシテ苟モ害ナケレハ何ノ妨ケモナキトナレ氏第一自然高低アル地價ヲ人作ニテ定ムルト固ヨリ良法トス可カラスシテ第二ニハ人民財産ノ權利ヲ損害スルト甚大ナリ何者嘗テ金ヲ多ク出セル者多ク金ヲ出セルノ利ヲ獲ルト能ハスシテ少ク金ヲ出セル者僥倖ニテ利ヲ獲ルトアレハナリ



故ニ田地ノ賣買ヲ許シ沽券高ニ準シ稅ヲ收メ  
シムト八月下此儘ニテ發行ヲ可カラザルノ論  
ナリ  
金納ノ事ニ至テ世ニ紛紜ノ論アリ官嘗テ米納  
ニ換ユルニ金納ヲ以スルノ命ヲ出セルヨアリ  
シニ民其苦情ヲ訴ヘシ者太多アリ其證據  
ナリ本邦ハ農ヲ以國ヲ立ル規模ニシテ薄海以  
内ノ人民米ニ因テ生活セザル者ハ殆希ナリ此

以都會街衢ヲ除クノ外ハ人民間ノ取引契約等  
大抵米ヲ以セサルヲナクシテ諸物ノ價勞苦ノ  
賃皆之ヲ以率トシテ之ヲ定ム此世人ノ瞭然ト  
シテ通曉スル處ナリ今若全國ノ農民ヲシテ稍  
餘財アラシムルカ或其居悉市肆ニ近クシテ米  
ヲ金ニ交換スルノ便アラシムルカ如キ寸ハ金  
納至テ便ナルヲ實ニ本議ニ掲クルカ如クナル  
可シ然ルニ其否ザルヲ以之ヲ便トセザル者多



キ丁亦不得已ノ勢ナリ此亦世人ノ能ク知ル所  
ナレハ必シモ細論スルヲ須タス今又我政府經  
濟ノ上ニ付キテ之ヲ論セシニ已ニ田地ノ價ヲ  
定メ若干年間ハ其價ニ據リ幾分ノ幾何ヲ收メ  
地租トシ廳費トシ以旧貢租ノ額ト大ニ運庭ス  
ル丁ナカラシメン然ル寸旧貢租ノ額一千二百  
万石一石三圓ニシテ三千六百万圓トナリ地券  
ノ價同シ米價ニ據テ算定シテ新稅三千六百万

圓ヲ得可キノ目的アリト虽モ若米價騰貴シテ  
六圓トナル寸ハ旧貢稅ノ額ニテハ七千二百万  
圓トナル可ケレモ新稅ハ年限間試ニ現行ノ例  
ヲ引ク者ナリ  
一錢モ増ス丁ナカル可シ此其利害ノ大略ナリ  
况又政府ヨリ支消スル所ノ項中ニ現米ヲ用ユ  
ル丁アリ第一華士族ニ給與スル祿高ノ如キ金  
ヲ以ストハ虽モ皆其嘗テ定ムル所ノ額ハ何石  
何斗何舛合ト現米ノ量ニ因ルヲ以所謂平均貢

太  
文



納相場ト称スル者ヲ用ヒタリ然ル寸ハ只金銀  
紙幣ヲ以其授與ノ媒介トナスノミニテ其實ハ  
現石ヲ以スルニ異ナルトナシ於是米價ノ賤キ  
寸ハ政府經濟ニ餘裕アル可シト虽此之ニ及シ  
テ其貴キ寸ハ經濟ニ窮スルヲアル可シ同上ノ  
計算ニ因リテ國家正租ノ入額金ニシテ三千六  
百萬圓トシ此中ヨリシテ華士族ノ禄ヲ給與セ  
ンニ試ニ一石三圓トシテ一千五百万圓ナリ之

ヲ除スルノ後尚二千一百万圓ヲ残ス然ルニ米  
價ハ如此時变换スル者ニシテ一時一倍ノ價ニ  
モ騰貴スルヲアラン其時ニ至テハ已ニ三千万  
圓ノ高ニ升レハ只六百万圓ヲ残ス可キノミ若  
又有マジキヲナカラ十圓ニモ至ルヲアラハ其  
高ハ五千万圓ニシテ國幣不足スルヲ千四百万  
圓ナル可シ故ニ金納ノ事ハ上下一切ノ算率ト  
ナル者悉ク金數ニ化シタルノ上ニ非サレハ便



